

# ことばと意味

児 玉 徳 美

## 1. ことばの捉え方

ことば（あるいは言語）とは意味と形式の結合したものである。意味とはことばに埋め込まれたもので特定の事象や意図を示す内的な思惟であり、形式とはその意味を表す音声や文字、あるいはそのつなぎ方である。人間が今日までの歴史を形成することができたのも、人間が言語を手に入れることができたためである。いったい言語とは何か、言語は何のためにあるのかという疑問が出てくる。2つの疑問は密接に関連している。

言語分析としては「言語とは何か」の第1の疑問においては分析対象の言語そのものが問題となり、言語が記号としてどのような特性をもち、その特性の習得がなぜ人間にのみ可能であるのかの課題を明らかにすることが重要である。「言語は何のためにあるのか」の第2の疑問においては言語の存在目的が問題となり、言語は人間社会の必要性を満たすために存在し、人間どうしの交流や争いの中で言語がどのような役割を果たしているのかの課題を明らかにすることが重要になる。

2つの疑問に答えることは言語分析にとって同じように重要である。しかし現実には2つの疑問のうちいずれを重視するかが言語理論によって異なる。両極をなす言語理論としてChomsky後の生成文法とHalliday後の選択体系機能言語学がある。生成文法は言語が形式化された規則の体系（つまり文法）であるとみなし、個人差や場面による差異を取り除いた、理想化された話し手・聞き手の言語能力（あるいはラング）を対象に、文を形成する規則の体系を明らかにしようとしている。規則の体系の多くは人間という種に生得的に備わる普遍的なものであると仮定している。これに対して、選択体系機能言語学は抽象的な構造をなすラングだけでなく実際に使用されるパロールをも対象に、あるいは文だけでなく言説をも対象に、言語が使用される場面・社会・文化などの文脈情報との関係で、言語が人間社会でどのような役割を果たしているかを明らかにしようとしている。生成文法が心理学上の先験的な知識や「認知」を重視して普遍的で生得的な言語能力に焦点を当てるのと対照的に、選択体系機能言語学は言語使用により何をなすかという社会学上の「活動」を重視して生後の経験の中での言語活動の諸相に焦点を当てている。

言語理論は何を重視するかにより理論上の枠組みや分析対象も違ってくる。生成文法は通例文を最大の分析対象とし、言語外の文脈情報を排除し、「科学」として言語形式の統語構造に詳しい。確かに言語表現は統語上文を繰り返したものであり、語や文は言語表現の基本単位である。しかし言語に埋め込まれている意味という場合、生成文法は選択体系機能言語学に比べて二重・三重に意味の考察範囲が狭い。選択体系機能言語学では第1に語・文とともに言説の意味をも扱い、第2に言語は人間社会の必要を満たすものとの考えから意味上言語と言語外の文脈情報との関係も扱っている。第3に両理論は分析の出発点として形式または統語論を優先するか、意味または意味論を優先するかの違いがみられる。生成文法は統語論を優先し、統語構造に意味解釈規則が適用されて意味

が表示されるのに対して、選択体系機能言語学では意味論を優先し社会体系が言語の意味体系に実現され、その意味体系から統語構造が派生するとみなしている。第1・第2の違いは直接言語の意味にかかわり、言語分析が言語活動をも対象にするとすれば、選択体系機能言語学のように広範囲の意味を対象にする必要がある。第3の違いは意味と形式についての言語観や理論の枠組みの問題であり、今日いずれとも結論が出ているわけではない。筆者としては、意味と形式のいずれが先に生まれ、いずれを言語分析や言語活動の出発点にすべきかは、あるいは論理的にいずれを優先すべきかは、二者択一の問題として恒常的に決定されるとは思わない。つまり局面により優先順位が変わるのが言語の実態であると考え。交錯する意味と形式の関係は本稿の考察課題でもある。

言語は何のためにあるのかの疑問と関連して、言語は思考や意志伝達（コミュニケーション）のための媒介手段であるとしばしばいわれる。記号は、本来、ある事象や世界を表す媒介手段であり、言語は人間が事象や世界について感じ・考える内容を表し、その判断を伝達するものである。人間がその歴史をつくってきたのも、思考し、相互に意志伝達し、相互理解することにより他者とよい関係をつくってきたためである。言語が果す働き（機能）ともいえる思考と意志伝達は吉本隆明流に言えば、「自己表出」と「指示表出」とも言い換えできる（詳しくは兎玉「言語とは何か」（準備中）参照）。言語理論によっては思考と意志伝達の一方の側面のみを強調するものがあるが、それは言語の実態を見誤ったものである。2つの働きは言語にとって不可分の形で結びついており、正確な思考や意志を言語表現する本来の思索過程では、2つの働きの違いは消えている。

現実には思考や思索の欠けた単なる情報伝達がしばしば言語で伝達され受容される。これも言語の働きであるとするならば、情報伝達〔受容〕は思考と結合した意志伝達や相互理解とは区別されるべきである。情報伝達〔受容〕は人間の主体的な行為である思考や意志伝達・相互理解と異なる受動的な行為である。情報化時代と呼ばれる今日、人は主体的に思考し意志伝達するより、容易に入手できる便利で貴重な既知の情報に頼ったり、他から伝達される情報を鵜呑みにしたりする。現実ではことばは思考や意志伝達のための媒介手段というより、単に情報を運ぶだけの媒介手段になりつつあるのかもしれない。

言語の捉え方は、言語理論においても言語の日常的な使用実態においても、多くの違いがみられる。言語を駆使できるのは人間にのみ許された特性であり、その言語がよくも悪くも人間の歴史を形成してきたとすれば、言語の本質や言語の使用実態を考察することにより少しでも人間の姿に迫ることができよう。言語には多様な領域が含まれており、言語一般が問題ではない。人間を支え、牽引してきた主要な要素は、言語の意味である。そこで本稿の第1の課題は意味がどのように言語に埋め込まれているかを探ることにある。もちろん言語記号としての形式を無視することはできない。ここでは言語の形式が意味をどのように支えているかが問題となる。第2の課題は、言語を習得し駆使できるのが人間の生得的な能力と生後の経験に由来するとすれば、両者はどのように関連し、言語の意味が人間の活動でどのような役割を果たしているかを探ることである。人間の活動では社会や個人の思考、および社会により形成される文化と言語の意味との相互影響関係を考察することになる。

言語の意味を介して人間や社会の姿をかいま見ることができれば幸いである。

## 2. 語・文・言説の意味：意味獲得と意味解釈

### 2.1. 語の場合：潜在的なラングとして閉じられた体系の語義

語・文・言説はそれぞれ固有の意味を有している。語の意味は通例語義と呼ばれる。個別の語を取り出してその語義を問われると、それぞれの語には潜在的な知識として有限の意味が浮かんでくる。各語には意味的にも統語的にも潜在的に使用可能な領域がある。この限定された制約はラングとして個別言語の体系の一部を構成している。

個別の語がラングとしてどのような語義を有するかは各言語によって異なる。例として日常的によく用いられる日本語の「水」「走る」と英語の *water, run* の語義を比較してみよう。

- (1) a. 水：(液体としてつめたい) 水、(「水が出る」などの) 洪水、(相撲で) 水入り  
 b. *water*：水、湯、水のある所、川、海域、体液；水をまく、給水する、涙 [よだれ] が出る
- (2) a. 走る：(人・動物・車などが) 走る、逃げる、(「流行に走る」のように、ある方向に) 向かう、(細長い道などが) 延びる  
 b. *run*：(人・動物・車などが) 走る、逃げる、徒歩競走に出る、急ぎの旅行をする、(川・水などが) 流れる、(機械などが) 動く、(道・うわさなどが) 広がる、(ある状態に) なる、(話しなどが) 書いてある、立候補する；走らせる、(液体を) 流す、(機械を) 動かす；走ること、走行距離、運行、連続公演、得点、(家畜の) 飼育場など

ほぼ同じ規模の日英語のポケット版辞典では「水」「走る」は5前後の語義が示されているにすぎないが、*water, run* は名詞・動詞を含めて30から70近くの語義が与えられている。日本語と英語で類似の形で拡大している語義がみられるが、1語の有する語義は英語が圧倒的に多い。「水」と *water*、「走る」と *run* が対応しているとはいえ、それぞれの語義の違いから、対応する意味・用法は厳密にはごく一部にすぎない。また英語は1語が多様な語義を有するからといって、言語活動であいまいな表現が日本語より多いわけではない。いずれの言語においてもラングとして潜在的に可能な意味や用法は他の語との共起により特化され、各語の意味・用法は各言語構造の体系に従い、固有の語彙体系を形成している。次例を参照されたい。

- (3) a. 彼は駅 [水辺 [\*水]、彼女の所 [\*彼女]] へ走って行った [\*走った]。 vs *He ran to the station [the water, her].*  
 b. ハイウェイが海岸に沿って走っている [\*走る]。 vs *The highway runs [\*is running] along the coast.*
- (4) a. *The play had a three-month run.* (その芝居は3ヶ月間上演された。)  
 b. *The team scored three runs in the second inning.* (そのチームは2回に3点入れた。)  
 c. *He built a new run for chickens.* (彼は新しい養鶏場を建てた。)

(2a) の日本語の「走る」は「歩く、飛ぶ」などと同じく「走る」という行為のみを示し、移動や状態を表すには (3a,b) のように「行く」や「…ている」をつけ加える必要がある。またある場所に向

かって「走る」場合、(3a) からうかがえるように、「駅」は場所とみなされるが、「水」や「彼女」は場所とみなされず、場所を示す語を補う必要がある。これに対して英語の run は (3a) にみられるように、行為だけでなく移動をも含意し、主語によっては (3b) のように行為でなく状態を示す。その結果、英語では名詞が容易に場所をも含意し、(2b) の water のように「水のある所」の海・湖・川などの水域を示す意味を獲得したり、(3b) の「走る」と run は状態を示す進行相が日英語で逆転することになる。また多義性に富む英語の語義は、(4a-c) からうかがえるように、共起語との関連で辻褄の合う表現として語義が特化されていく。

言語により語義が異なるが、現実では異なる言語の特定の語が1対1で対応すると錯覚することがしばしば起こる。例えば今井むつみ『ことばと思考』(2010:38 - 39, 岩波新書)は英語で「数えられるモノ」を表す object が「数えられないモノ」を表す substance や stuff の対立語として頻用されることに着目して、英語の object に日本語の「物体」を対応させ、アンケートで日本人とアメリカ人を対象に水・砂・人・動物が「物体」か object かと尋ねている。ほとんどの日本人は水や砂は「物体」であるが、人や動物は「物体」ではないと答え、逆にアメリカ人の多くは水や砂は object でないが、人や動物は object であると回答した。日米での回答の食い違いは、設問での両語の意味からくるごく当然の結果である。今井は名詞の(不)加算性について日米の違いを調べようとしたのであろうが、アンケートの設問はその目的を達成する上で不適切である。「物体」や object がそれぞれ多様な語義を有していることを忘れ、両語を等式で結びつけているためである。調査の意図を正確に設問しようとするれば、「物体」を「(数えられる)モノ」に、object を (countable) object に代えるべきである。そのように代えた場合、(不)加算性の概念化において日米の回答にそれほどの食い違いは生じないであろう。

日本語は1語の有する語義が英語に比べて圧倒的に少なく、語を形成する音素の数も少ない。英語の音素には日本語にない /l/ と /r/、/h/ と /f/、/b/ と /v/ の対立や日本語の /ア/ に対応して /a,ɑ,ə,ʌ/ などがあり、音素の組み合わせにしても日本語で不可能な子音と子音の結合が可能であり、日本語では長母音・二重母音が2つの要素に分割できるが英語では不可分の音節単位として扱われたりする。音素の数や組み合わせが少ない日本語に同音異義語が多いのも当然の結果である。それでは日本語は日常の言語活動で語義の特化に不便が生じるのではないかの疑問が出てくるが、現実にはそれほどの不便はない。次例を参照されたい。

(5) 「キ」の音声からなる語を用いる表現

a. 木の枝、気を失う、忌が明ける、奇をてらう、軌を一にする、反撃の機をうかがう、思い出の記

b. 木々、季語、忌引、語気、好機、前期など

(6) a. 「コウキ」: 公器、光輝、好奇、好機、後期、香気など

b. 「コウギ」: 公儀、広義、好技、抗議、厚誼、講義など

(5a.,b) は同じ「キ」の音声からなる語句や複合語の例である。各例の「キ」は異なる語源に由来し、「キ」の意味は大きく異なるが、コロケーションと呼ばれる他の語とのつながりにより「キ」に異なる漢字が当てられ、「キ」の意味解釈に混乱が生じるわけではない。(6a,b) は複合語の「コウキ」と「コウギ」の例である。たいていのポケット版辞典では両複合語が10以上挙げてあり、漢字が意味

の違いを合図している。「コウショウ」は口承・公称・交渉など、複合語が一番多くて50近くあるといわれている。(5)(6)は話しことばにおいて音声は同じ「キ」や「コウキ」「コウギ」からなるが、共起語との関連でそれぞれ異なる漢字が当てられ、同音異義語の意味解釈が容易になされる。同音異義語や多義語の意味は共起語との関連で特化されるとはいえ、表音文字言語の英語と表意文字の漢字を含む日本語では大きな違いがみられる。共起語との関係を除けば、英語は意味の特化が音声のみ(時につづり)によって決定されるのに対して、日本語では音声とともに、音声を表す漢字や仮名の異なる文字によって決定される。

本稿の冒頭で言語を形成する形式とは「音声や文字、あるいはそのつなぎ方」であると述べたが、語義が英語では音声とそのつなぎ方によって特化され、日本語では音声と文字、それに両者のつなぎ方によって特化されることになる。今日、日本では発音において高低アクセントの平板化が進行しており、このまま進めば、将来話しことばの意味解釈に大きな混乱を招きかねないと危惧されている。しかし漢字の効用は話しことばだけでなく書きことばにもみられる。漢字の導入は意味解釈を容易にするだけでない。大和ことばに中国語の概念をも注入し、日本語の語義そのものを豊にし、言語機能を高めている。第二次大戦後、子どもの家庭の貧富により生じやすい教育の差別化を防ぐため、あるいは文字教育を簡略化するため、日本語で漢字の廃止を訴える主張がみられた。しかしもし漢字の廃止が実施されていたら、類縁性のない同音異義語を判別する手立てがなくなり、日本語は混乱し、言語機能を果せなくなるであろう。

日本と同じく歴史的に漢字文化の影響を強くうけてきた韓国では、1970年以降教科書から漢字が消え、漢字離れが進んでいる。しかし漢字を排したハングルによる韓国語ではその7割以上が漢字に由来するため、例えば語義として類縁性のない「伝記, 電気, 転機」がいずれも同じ「チョンギ」と発音され、その区別がつきにくくなっている。元の漢字がわかれば容易に理解できることから、最近学校教育で漢字教育が復活しつつあるといわれている(詳しくは菅野則子『文字・文・ことばの近代化』2010:29、同成社、参照)。語源と絶縁した言語は語彙の理解に苦しみ、言語の力を弱める。同じ現象は漢字圏から離脱し、アルファベット文字に代えたベトナム語にもいえると思われる。すべて表音文字化したハングルやベトナム語と違って、日本語は歴史的に表音文字の仮名(すなわち和語を示す平仮名と中国語以外の外来語を示す片仮名)と表意文字の漢字が合体した、世界に類をみない固有の体系を築いている。この文字体系は音素の数や組み合わせの少なさを補い、言語形式そのものが意味と深い関係をもっている。今後ともこの特性は堅持されるべきであろう。

言語知識として長期記憶されるラングに属するものは音声と結合した文字や語(義)に限らない。語と語のつながりからなるコロケーション(語連結)、個別言語に固有な慣用句、語の意味・用法を規定する文法(文法規則・構文・言語類型)なども含まれる。ラングが複雑な記号体系として厳しい制約をもち、しかもその制約が記憶力により言語知識として保持されていることにより、文や言説は多様で複雑な意味を表現することができる。

## 2.2. 文・言説の場合：パロールとしての意味

どの言語もラングとして有限の語や文法を用いて、パロールとして文脈情報を考慮しながら無限の文をつくっていく。つまり個別言語は音韻・形態・意味・統語法それぞれの領域において有限の「閉じられた体系」を有し、その「閉じられた体系」を基礎に「開かれた」多様な意味の世界をつくっていく。日常の言語使用においてはその場その場で新しい文を無限につくり、外的刺激がなくても

言語を駆使し、状況に応じて適切に対応する「言語の創造性」がみられる。語の潜在的に可能な意味は文においてはじめて特化され、思考の世界が始まる。文は移ろいやすく、特定の諺や標語を除いて語のように長期記憶されるものではない。状況に応じて新しい意味の世界をつくる点で語と決定的に異なる。

論理学は記号として文が指示する厳密な意味にこだわり、現実世界での真偽との関連で「断定の意味を表す文」を命題と称し、命題間の関係を分析している。

- (7) a. 太郎が [は] 一冊の本を買った。  
 b. 一冊の本が [は] 太郎によって買われた。  
 c. Taroo bought a book.  
 d. A book was bought by Taroo.

上例の (a) - (d) は能動文と受身文、日本語と英語で表現法が異なるが、同じ意味内容を伝え、同一の命題を表すといわれる。確かに「太郎」「一冊の本」という辞項と「過去の購入」という行為の意味的關係は同一である。しかし実際の言語使用では4つの文が同じ場面で用いられるわけではない。例えば (7a,b) の主語につく「が」と「は」は前後の文脈との関係が異なり、必ずしも同じ場面で用いられない。また (7b,d) は同じ受身文であるが、定名詞を主語とする傾向の強い英語では (7d) が日本語の (7b) と同じように用いられることにはならない。要するに、日常言語は論理学での厳格な命題論理よりはるかに豊かである。豊かであるだけに、あいまいさも忍び込みやすい。その結果、文や言説はあいまいにも使えるし、論理学のように厳格にも使える。日常言語をどのように使用するかは個人や社会によって違ってくる。

言説は文を連ねて意味上まとまりをなす言語表現である。文より詳しく話し手の思いや主張を語る、より高次の意味の世界である。初めの文の後でどのような文が続くか予測できないが、文をデタラメに並べて言説が成立するわけでもない。言説が意味上まとまりをなすためには、一連の文が関連性を持ち、全体が一貫性をもつものでなければならない。ここでは文を対象にした真偽性や無矛盾性・含意といった単純な論理操作や意味操作だけでなく、より幅広い意味世界の組織原理が必要とされる。一連の文は事態の状況・背景・事態の推移・因果関係・詳述・対比・並列・類推・比喩など、多様な記述法に従って、あるいは何を語り何を語らないかについて個別社会の時代精神や言説の秩序に沿って展開する。展開の仕方は話し手がどのような意味世界を誰に向かって語るかにより違ってくる。このように複雑な意味世界の表現は、ラングとしての言語体系を獲得してはじめて可能になる。

言語は音楽や絵画などの記号と違って形式上一度に1つの音声（あるいは文字）しか用いられず、意味上一度に1つの事態しか表現することができない。つまり言語には文や言説において不可避的に左から右への線条化という制約がある。この制約のお陰で言語は形式上厳密な法則化や意味上豊富で精密な表現力を備え、諸言語の普遍性も生まれてくる。例えば文の語順をとりあげてみよう。動詞の位置を不問にして名詞の主語・目的語の位置をみると、世界のほとんどの言語で主語が目的語に前置している。語順は形式上の特徴を示すものであるが、その背後には意味が関与している。ここでは主語は目的語より強い焦点を当てられ、また一般に運動の源となるエネルギーが主語から目的語に移動し、人間が事態を認知する際の順序が言語の基本語順に反映している（詳しくは兎玉『い

まあえてことば・言語分析・言語理論のあり方を問う』2010:170、開拓社、参照)。

不可避的な線条化は個別言語に多様な語順を生む原因にもなる。日本語の基本語順では主語が目的語に前置するが、文脈によっては目的語を主語に前置することも可能である。先に (7c, d) では英語の主語には不定名詞より定名詞が好まれるとしたが、目的語においては定か不定かのこだわりはなく、通例 SVO の形式が守られる。一方、中国語では定・不定の既知情報か否かだけでなく、出来事で生じる事態の発生順序が、名詞の主語・目的語だけでなく動詞から場所・時を表す副詞語句に至るまでの語順にしばしば反映する。

- (8) a. 賊 跑 了。(その泥棒が逃げた。)  
 b. 跑 了 賊。(逃げたのはある泥棒だ。)
- (9) a. 他 把黑板上的字 擦 了。(彼は(すでに書いてある)黑板の字を消した。)  
 b. 他 在黑板上 写 字。(彼が黑板に書いたのは字だ。)
- (10) a. 他 在桌子上 跳。(彼はテーブルの上で跳びはねた。)  
 b. 他 跳 在桌子上。(彼は跳んでテーブルに上がった。)
- (11) a. 他 两天之内 回来。(彼は2・3日のうちに帰ってくる。)  
 b. 他 在中国 住了 三年。(彼は中国に住んで三年になる。)

上例では下線部において中国語の語順・意味の違いに注目されたい。( ) 内の日本語は中国語の語順に合わせて中国語の意味を示そうとしたものである。(8) (9) は動詞と名詞が結合した例である。(8a,b) では同じ動詞でもその主語が定か不定かで語順が逆転し、(9a,b) では同じ目的語が動詞の行為前に存在するか、動詞の行為後に生じるかで語順が逆転している。(10) (11) は動詞と副詞語句が結合した例である。(10a,b) では場所を表す副詞語句が動詞の行為が生じる場か行為の結果移動する場かにより、(11a,b) では時間を表す副詞語句が動詞の行為が生じる前か後かにより語順が逆転している。中国語はあらゆる品詞にわたって認知した事態をその順序に従って概念化し、言語化することが多い。

英語が名詞・副詞などの品詞や主語・目的語などの文法機能など、形式上の特質を優先して語順を決めているのに対して、中国語は日本語に似て語順の柔軟性をもっている。日本語は動詞を文末に置きさえすれば、前後の文脈情報や文法機能を構成する語群の長短などにより比較的自由に語順変更が許されるが、中国語の語順の柔軟性は認知の順序と密接に関連しており、日本語の柔軟性とは質が異なる。中国語では語順の違いが意味の違いを合図し、構文の違いともなっている。

### 2.3. 意味獲得と意味解釈の違い

言語を駆使できることは人間固有の特質である。人間はどの社会に生まれても、4・5歳までにその社会の言語を母語として獲得していく。個別言語は生得的に人間にのみ開かれた言語の特性のうちの一部を選択し、特定の限られた体系をなすものである。諸言語の普遍性と多様性が生まれるのも、このためである。

個別言語は有限の要素から無限の文や言説をつくり、無限の意味世界を築くために、人間に開かれた言語体系のうち、特定の閉じられた体系を選んでいく。つまり語・文・言説において個別言語に特有な構文・スタイルなどを獲得していく。その際、言語記号において表したい意味とそれを

表す記号の数を比較したとき、意味の方が形式より圧倒的に多く、必然的に形式に多様な意味が付与されることになる。まず初めに語の意味を対象に、語義を拡大する過程で多様な意味がどのように獲得され、解釈されるかをみていく。

辞書編集者は多様な語義を歴史的、または意味的・統語的なつながりに基づいて、あるいは使用頻度数に応じて配列していく。そのほうが語義をデタラメに並べるよりは1つのまとまりをなしている。しかし重要なことは、その「まとまり」が何を表すかということになる。編集者の中には語が歴史的に、または共時的に多様な意味を獲得する過程が論理的な発展順序を反映しているとみなす者もある。

世界最大の辞書であるOEDの初代編集長のJ.A.H.Murrayは英語の語義発達過程がそれを記述するだけでほぼ合理的・論理的発達を示していると述べている。類似の主張は『字統』『字訓』『字通』の編者である白川静にもみられる。白川は漢字の字形・発音・意味の起源から説き起こし、字源・語源を明らかにすることによってしばしば語義の展開を明らかにできるといふ。Murrayと白川は語義の歴史的発達がしばしば論理的発達になるとする点で共通している。『英語多義ネットワーク辞典』(2007、小学館)の編者である瀬戸賢一は歴史的発達でなく共時的な観点から、中心義を語義拡大の出発点として比喻を介して英語の多義性に富む意味のつながりを記述している。三者はそれぞれ対象言語や記述観点が異なるが、個別言語の語義発達に何らかの論理必然性を認める点で共通している。

確かに個別言語の語義は何らかの「つながり」に基づいて拡大発達していく。しかしそのつながりは無限ともいえるほどの広がりをもつもののうち、個別言語がそのごく一部を気まぐれに選んでいるにすぎない。その発達過程に論理必然性や言語普遍性が存在するとみるのは辞書編集者や言語学者の錯覚である。そのことは日英語の比較対照で挙げたわずかな用例(1)(2)からも明白である。諸言語の語義獲得〔拡大〕の背後にあるのは、むしろ偶然性や恣意性である。偶然性や恣意性は語義獲得だけでなく通常のコロケーションや構文の語連結にもみられ、慣用句においてはその度合いがいつそう強まっていく。個別言語は語源をもとに語義を拡大したり特定の語連結を形成するが、特定の言語集団が特定の語の語源とのつながりでその語を他の新しい意味にも用い、その意味がその言語共同体に広がった段階でその語はラングとして多義性を獲得することになる。この場合、どの言語集団で使用される新しい意味が言語共同体のものとなるか否かを予測したり規定できるものではない。

つながりを介して生成される個別言語の語義獲得過程に論理必然性がないのに対して、未知の言語を習得したり、多様な語義を前後の文脈に基づいて理解できる語義解釈過程には人間の言語能力に由来する論理性や普遍性が存在する。これは意味獲得が個別言語の歴史的変化を跡づけるのに対して、意味解釈では語義が既知であるか未知であるかに関係なく、文脈を通して解釈され、そこでは人間に開かれた体系に沿ってすべての人間に共通する意味原理が働いているためである。辞書編集者が閉じられた体系に基づく個別言語の語義配列に何らかの論理性や普遍性を想定するのは、意味獲得と意味解釈を同列にみなしていることに由来する。両者は異なる心的過程であり、あくまで区別されるべきである。

個別言語の意味獲得と諸言語の意味解釈の違いは、個別言語の音韻獲得と諸言語の音韻解釈の違いと似ている。同じ祖語から派生した諸言語や同じ個別言語に由来する諸方言が歴史的にどのような音韻を獲得してきたか、あるいは今後どのように変化するかは予測できないが、諸言語の音韻を

構成する原理についての解釈は、人間言語に可能な音韻体系に基づいて説明される。個別言語の歴史的な意味獲得や音韻獲得は、人間言語に許される意味組成や音素などの中から論理必然的に選ばれたものというより、むしろ気まぐれに取捨選択されたものである。

言語上、イヌは「ワンワン」(bowwow) と鳴き、ネコは「ニャーン」(mew) と鳴くとされるが、実際の鳴き声は異なるかもしれない。太陽は赤か黄色か、虹は何種の色からなるかも文化によって異なるが、実際の音や色に多様な解釈があり、個人によっても解釈に違いがあると心得ている。われわれは言語や文化において「約束ごと」とされる表現を必ずしもそのまま受け入れているわけではない。その表現は象徴的なものであり、その正確な意味解釈には幅があることを知っている。本来、意味解釈には柔軟性があり、個別言語によって語義の多義性や慣用句、あるいは類義語をなす語群に違いがあっても不思議でない。いずれも意味獲得の過程で生成されるものである。しかしそうした個別言語固有の表現の意味を理解できないわけではない。ここには普遍的な意味解釈が働いているためである。

多義性の獲得は語より小さい単位の形態素にもみられる。日本語の述部は語の動詞・形容(動)詞に後置する多様な意味を表す形態素の連鎖からなる。具体的に「(ら)れる」に付与される意味をみてみよう。

- (12) a. 太郎がキャプテンに選ばれた。／突然雨に降られた。(受身)  
 b. 楽しかった日々が思い出される。／秋の気配が感じられる。(自発)  
 c. 夜、よく星が見(ら)れる。／都合があって行かれなかった。(可能)  
 d. 先生が昨日こちらへ来られました。／先生も参加されます。(尊敬)
- (13) a. その点で両者は区別されよう。(受身・自発・可能)  
 b. 先生は明日そちらへ行かれるはずです。(可能・尊敬)

一種の助動詞とみなされる「(ら)れる」には(12a-d)末尾の( )内に示した意味がある。その結果、(13a,b)のように複数の意味のうちいずれにも解釈されるあいまいさが生まれる。日本語でなぜこの4種の意味が、たまたま同じ形式で表現されるのかという疑問がある。ここには成瀬武史(『ことばの磁界』1979:95、文化評論出版)が指摘するように、わが意に添っていてもいなくても従順に受け入れるしかない不可抗的事態への心遣いが働いているとも考えられる。

同じ1つの形式に多様な意味としてどのような意味を負わせるかは、一方ではその言語社会の思考法や文化とも関連し、他方では他言語との統語法の違いにもつながる。上例との関連で英語と比較してみると、英語は受身が「be + 過去分詞」で他動詞のみに用いられるが、日本語は他動詞「選ぶ」だけでなく自動詞の「降る」にも用いられる。自発や可能は英語では法助動詞で表され、尊敬を表す語彙形式はない。また日本語の「(ら)れる」は過去時制として「(ら)れた」となり、自発や可能も純粹の過去形として用いられ、法助動詞の体系にも違いをもたらしている。英語の can, may, must などがたとえ過去形に用いられても話し手の現在の心的態度を示すのに対して、それに対応する日本語は「～できた」「～かもしれなかった」「～でなければならなかった」などは過去の事態にも言及することが可能である。

英語の母語話者からみると、日本語が同じ形式の「(ら)れる」になぜまったく異質な意味をもたせているのか不可解に思われるかもしれない。しかし日本語の母語話者にとって「(ら)れる」は、

ラングの言語知識として長期記憶され、ごく自然に受容されている。ここには物の見方や価値観が関与している。逆に、日本人からみると、英語が同じ形式になぜ異質な意味をもたせているのか不可解に思われることがある。例えば英語の *have* は一般的な語として「持っている」という所有の意味のほか、多様な語義に拡大する過程で原義が希薄化して完了を表す助動詞にも用いられる。また *subject* は「臣民・科目・話題」の意味では支配・研究・議論の対象として〈人の行為を受ける〉受動的な含意をもつが、「主語・主体」の意味では〈行為するもの〉として能動的な含意をもっている。それぞれの語義は日本語ではまったく無関係なものとして異なる語で示される。日英語の類義語についてみると、例えば日本語の「ナイーブ」は「繊細で感じやすい」とどちらかといえば、よい意味で用いられるが、英語の *naïve* は通例「単純無知で世間知らずな」の皮肉めいた意味で用いられる。また日本語では大人に対しても「かわいい」がしばしばほめことばとして用いられるが、その意味をもつ *cute* や *pretty* は子どもに対しては用いられるが、大人に対してはほめことばにならない。英語の両語は「子どもっぽさ」の含意をもつため、強さと自立を期待される大人にふさわしくないとみなされるためである。その背後には大人とまだそこに至らない子どもを明確に区別する習慣が存在する（詳しくは児玉『言語理論と言語論』1998:185、くろしお出版、参照）。ことばにどのような意味を付与するかは文化ともかかわる。一見相反する意味やふるまいが同じ言語や文化に同居することもある。言語と思考・文化の関係については次節で考察する。

これまでみたように、言語形式と意味の結合には、個別言語においても諸言語間においても、多くの恣意性と規則性が交錯している。この言語の特質が人間の諸活動の多様性や普遍性につながっている。諸言語の異同を対象にするものとしては大きく類型論研究と普遍性研究がある。類型論研究は諸言語の音韻・形態・統語法・意味の違いに焦点を当て、その違いを類型化するものである。例えば意味の違いは本節でみた語彙だけでなく (8) - (11) でみた構文、あるいは言説の秩序などにみられる。一方、普遍性研究は人間言語に共通する特性の発見が中心となる。人間はどの言語社会に生まれても 4・5 歳で母語を駆使できるようになること自体が言語の最大の特徴であり、それを可能にしているものとして多様に分岐する諸言語の構造の背後に存在するであろう原理を探ろうとしている。類型論研究と普遍性研究は一見正反対で互いに相容れないものと思われるかもしれない。しかし類型論研究が生後の経験を介して言語習得や意味獲得を考察し、普遍性研究が生得的な言語能力や構造の背後にひそむ原理や意味解釈を考察するものである。両者が対象とする領域は言語活動にとって不可欠なものであり、本来、相互に補完されるべきものである。

### 3. ことばと実態と意味

#### 3.1. ことばと思考との関係

ことば（言語）は実態を映す鏡であり、ことばと実態をつなぐのが意味である。実態がないとき、それを映すことばはない。しかし現実にはしばしば同じ実態でも鏡に映る姿が違ってくる。この場合、実態がないからそれを伝えることばがないのではなく、実態は以前からあるが、それをどう感じるか、その実態を他の実態と区別するか否かなど、実態を見る眼差しが異なるためである。つまり、実態にどのような意味を感じ、どのような価値を見出し、どのように表現するかである。その違いは時代・社会・個人・言語構造などの違いとして現れる。本節および次節はそのような違いを

中心に、言語が思考や文化の違いにどのように関与するかを考察する。言語と思考と文化はそれぞれが本来独立した領域であり、必ずしも因果関係で直結するものではない。しかしまったく無関係でもなく、どのように関連するかを探りたい。

実態の捉え方の違いを具体的にみてみよう。例えば「もったいない」「セクハラ (sexual harassment)」の概念はどの社会にも昔から大なり小なり存在するが、明示的に言語化することにより、その意味が明確に意識され行動に反映することにもなる。1970年代にアメリカで始まった英語の性差改革は男性支配の社会構造が言語の性差に反映していると主張した。例えば *man* / *he* は「男」とともに「人」を指し、*woman, hostess, waitress* などは基本形の男性名詞に女性接辞がついている。女性を示す語は男性を示す語の付随的・従属的な構成物とみなされた。その結果、性差を示す語が意識され、かつて男女兼用語であった *chairman, policeman* などがもはや兼用語として用いられなくなり、結婚を基準に区別する *Miss* と *Mrs.* に代わって *Ms.* が用いられるようになった。言語の改革は既存の言語を基礎にせざるをえないため、それほど容易には進まない。英語で「人」を表す場合、複数形としては通例 *people* を用いるが、単数形に *person, human (being), man* などのうち何を用いるか、その代名詞に *he, she, he or she* のいずれを用いるかは今日まだ定まっていない。次例は名詞の数と関連して日英語の違いを示している。

(14) 古池や かわず飛び込む 水の音 —— 芭蕉

(15) What makes more noise than a cat stuck in a tree? —— Two cats in a tree. (木にひっかかっている猫よりもっとうるさいのは何でしょう。——木にひっかかっている2匹の猫です。)

(14) の句は古池に飛び込む蛙の数を明示していないが、数は文脈から1匹と考えられる。そのほうがこの状況での静けさがいっそう増すためである。この含意は詠嘆の意を表す切れ字の「や」がつく「古池」とそこで展開する状況が結合することによって生まれる(その含意が生まれる背景については後ほど3.2節で詳述する)。外国語としての初級日本語学習者がこの句を絵にした場合、そのような文脈の理解に苦しみ、しばしば数匹の蛙が古池に飛び込む図を描いたりする。その際、(14) は平凡な状況描写と受けとめられ、「それでどうした?」と問い返されることにもなる。この句の含意や日本語の約束事(つまり文法)が理解されない場合、リービ英雄が9.11事件を題材にした小説でニューヨークの塔崩壊のイメージと重ねて小説のタイトルを『千々にくだけて——*broken, broken into thousands of pieces*』(2008、講談社文庫)とした意図も理解されないであろう。このタイトルは芭蕉が松島をうたった句「島々や 千々にくだけて 夏の海」からとったものである。(その意図について詳しくは児玉「言語とは何か」(準備中)参照)。一方、(15) は子ども向けの英語のなぞである(用例は成瀬1979:108による)。冠詞をもたない日本語のみになじんだ者にとってなぞを解くのはむずかしい。( )内の日本語はなぞになりにくい。英語の *a cat* は猫の総称にも個別特定の1匹の猫にも用いられ、母語話者はそのいずれであるかを文脈から判断するが、( )内の日本語では総称の猫と解釈し、猫以外のものからうるさいものを探そうとする。日本語としてはなぞ文の「猫」の前に「1匹の」を加えると、個別特定の猫の解釈が生まれ、かろうじてなぞとして成立する。

日本語は一般に断定したり明示することを避け、あいまいさを特徴とするときしばしばいわれる。これは語に限らない。文や言説にも及んでいる。あいまいさは用例(12)(13)の不可抗的状况を表す「(ら)れる」の意味や(14)の名詞の数にもみられるが、次例も参照されたい。

- (16) a. こちらは田中ですが。／3日ほど入院した。／私的にはそう思います。／とてもよかったかな、みたいな感じがします。
- b. 善処します。／安らかに眠って下さい 過ちは繰返ませぬから——広島市の原爆死没者慰霊碑の碑文
- c. 21世紀の世界を解く鍵は「曖昧」にある——河合隼雄・中沢新一（編）『「あいまい」の知』（2003、岩波書店）

(16a) の下線部はいずれも断定を避けたばかりの表現であり、下線部がなくても通用する。(16b) の「善処します」は問題解決を先送りする常套句であり、善処の中身は不明である。(16b) の碑文で過ちを犯し、繰返さないと誓っている主語は日本なのかアメリカなのか、それとも人類なのかと、時代や個人の価値観や信念体系によってその解釈も違っている。(16c) は河合・中沢 (2003) の本の帯に書かれた宣伝文である。河合は古くから「あいまいさ」を称揚し、「あいまいさ」への信仰は筋金入りである。河合は離言真如を依言真如の上に置き、ことばを超えたところに真理があるとする。この言語観はことばとロゴスが一体となっているロゴス観の対極にあるが、日本では仏教の伝統もあり、河合のように論理や合理の限界を指摘する者が多い（詳しくは児玉『ヒト・ことば・社会』2006、開拓社；児玉2010参照）。論理や合理に代わる対案は必ずしも明確でない。その結果、あいまいさが日本の言説（の秩序）の特徴となり、思考のあいまいさと結びついている。論理整合性からみた思考のあいまいさがいったいどこから来るのかについてその原因を問う必要がある。これは次節で考察するが、文化とも関連するはずである。

人は母語に熟達するにつれて言語の意味と形式を一体のものとして捉え、両者がことばとして恣意的に結合していることを忘れる。無意識的にことばを用いて思考し、思考するためにことばを用いるなかで、いつの間にかことばと思考の間に相互影響関係が生まれる。本来、思考は人の主体的な心的過程であり、物事の理解・概念化・推論・問題解決などを通じて判断や行動の基礎を与えるものである。もちろん、ことばは人の受動的な行為にも用いられる。それは1節でみたように情報伝達・受容として指令や命令をそのまま伝えたり受け取ったり、既存の知識を機械的に継承したり、特定の価値を金科玉条とする場合などである。この場合、無批判にことばを受容するとしたら、ことばが思考に影響を与えるどころか、ことばが思考を支配従属させることになる。人がことばを使うと同じように、ことばが人を使うことにもなる。社会で共有される言説の秩序や常識や共同幻想も批判の眼をもってみるか否かによって、人がことばを使うか、ことばが人を使い支配するかの分かれ目となる。

20世紀末より旧イデオロギーの崩壊とともに多様な価値観が生まれている。そのことは多くのサブカルチャーの出現からもうかがえる。多様な価値観やサブカルチャーは、情報化時代と併行して出現し、多様な価値や情報を検討した結果生まれたというより、個人の好みや趣味にそって取捨選択されている。このような現象は社会という概念が時代により大きく変化していることと無関係ではない。現代人は科学技術の発達により便利で快適な生活を満喫している。かつて存在した集落共同体での絆が失われて久しい。近代化の中で都市化が進み、いまや社会は豊かな生活のため経済成長を求める利益共同体となっている。人と人のつながりは隣人どうしが直接顔を合わせるのではなく、同じ好みや関心、あるいは情報というモノを通して形成されていく。喪失した旧イデオロギー

に代わる新しい価値観を見出せないまま、人はより快適な生活への欲求を満たそうとして情報の海の中をさまよっている。世界の一部で生活が快適で便利になったとはいえ、世界全体としては貧困や不正・不平等は昔も今もあまり変わらないように見える。ただ世界の眼は不合理や不平等を正すよりは自己の経済的豊かさを求める欲求に向かっている。

現代社会は榊原英資（『幼児化する日本社会 拝金主義と反知性主義』2007、東洋経済新報社）が指摘するように、お金や見かけを大切にす拝金主義と反知性主義が横行し、ことばが軽くなっている。ここでは主体的な思考や意思決定を促すはずのことばがその力を失い、お金や見かけへの欲求を満たす単なる手段に化している。辺見庸（『水の透視画法』2011、共同通信社）は榊原以上に厳しく人間のすさみを告発している。辺見によると、現代は人間の声がどこにも届かない時代であるが、これは人間がことばを奪われたのではなく、人間がことばから見放されたためである。つまり、ことばの主体がすでにむなしいから、ことばの方で耐えきれずに、主体である人間たちを見放したという。先ほど「人がことばを使うと同じように、ことばが人を使う」と述べたが、辺見から見ると、人間がすさみ墮落し、ことば本来の役割を見失った結果、ことばと人間のつながりまでも消えようとしている。

### 3.2. ことばと文化との関係

「文化」という用語はあいまいでいろんな意味に用いられるが、一応ここでは「民族などの社会集団で様式化された、思考や行動における反応の型」と考える。現実には同じ社会集団のあらゆる領域で常に均一な様式化がみられるわけではない。「様式化された型」とはいえ多くの例外があり、一般論としての様式化である。領域によっては逆の現象さえ時にみられる。例えば仏教の影響から依言真如より離言真如を尊び、多弁・能弁より寡黙や物静かなことを好む日本人が駅構内や店内や街頭などでの騒々しい案内や宣伝などになぜ耐えられるのか、自己を主張することに控え目な日本人がカラオケでわれもわれもとマイクをとる積極性はどうつながるのか。かつて R. Benedict (*The Chrysanthemum and the Sword — Patterns of Japanese Culture*, 1946, Houghton Mifflin Co.) が指摘した「菊」と「刀」のように、一見相反する価値観が同じ文化に共存することにもなる。

本節は主として日本文化と日本語との関係を考察する。

- (17) a. 察しの文化、わび・さびの幽玄の世界、クダクダしく語ることの野暮を嫌ういきの文化
- b. 表現・主張・責任主体などのあいまいさ、ホンネとタテマエの使い分け
- c. (自己の主張より) 全体性・コンテクストへの配慮、(他者を傷つけない) 共存の精神
- d. 強い対象依存性、甘えの構造

(17) は日本文化の特徴といわれるものを下位区分したものである。下位区分された特徴は (a) から (d) へとそれぞれつながっている。言挙げしない察しの文化 (17a) は人の心の奥底へ侵入することを嫌い、すべてを描くより想像や含意の豊かさを重んじることにより、因果関係や論理を超えたあいまいな思考法 (17b) を生み出している。日本では古くから言霊思想が根強く、ことばには霊力が宿り、発せられることばの内容が実現する力があると考えられた。そのため言挙げすることが忌み嫌われ、言挙げしないことを美風とし、やがては自己の主張まで控える言語風土ができあがった。自己の主張より、自己を取り巻く、自然を含む全体性への配慮をする中で他者を傷つけないで全体の

秩序 (17c) を大切に、周囲や対象に敏感に反応しながらも、他者への「甘え」(17d) を生んでいる。(17c, d) がうまく結合した場合、部分を構成する諸要素が相互依存しながら調和のとれた全体をつくりあげていく。しかし (17c,d) がうまく結合しない場合、「出る杭は打たれ、長い物には巻かれ」、全体を構成する部分が見えにくくなっていく。

次例は上記のような特徴をもつ日本文化の指標語句であり、各末尾の ( ) 内は文化の特徴を示している。

- (18) a. 以心伝心、風情、空気を読む (17a)  
 b. 玉虫色、なんとなく、成り行き (17b)  
 c. 世間体、花鳥風月、和 (17c)  
 d. 甘える、恩、ウチとソト (17d)

文化指標語句は意味上その文化圏で好まれ、頻用されることばである。その限りでは文化と言語の好みの問題であり、ごく一般的な関連を示しているにすぎない。言語と文化の関連は、3.1 節の冒頭でみたように、言語と思考との関係と同じく、直結するものではない。1対1で対応しないとすれば、文化の特徴がどのような言語構造の特徴に由来し、あるいは文化と言語構造がどのような相互影響関係にあるかを知ることが重要である。言語構造とは言語の意味と形式の両面にかかわるものである。

言語構造上、諸言語は統語型言語と語用論型言語の言語類型に大別される。前者には英語・フランス語などインド・ヨーロッパ語族の言語が属し、統語上の形式の違いを重視するのに対して、後者は日本語・フィリピン諸語などアジアやアフリカの多くの言語が属し、文脈情報を含む意味に敏感である(詳しくは兎玉 2010:151 参照)。ここでは語用論型言語に属する日本語構造がどのように日本文化と関連するかを考察する。

- (19) a. 文脈情報を重視する。  
 b. 構造上既知の情報や文脈からそれとわかる語句を省略する。  
 c. 性・数・時制などを示す厳密な文法形態に欠ける。  
 d. 全体と部分の関係は主題・題述の主題構造によって示される。  
 e. 自分を取り巻く周囲や対象への配慮が厚い。

(19a-e) は日本語構造が有する語用論型言語の特徴である。(19) と (17) の日本文化の特徴との関連を具体的な用例で検証してみよう。

(19a-c) が結合することで用例 (14) (16a-c) のような表現を可能にし、(17a) の察しの文化や (17b) の言語表現のあいまいさが生まれる。先ほど (14) の句は切れ字や日本語文法の約束事によって成立していると述べたが、その理解には日本文化も強く関与している。英語には切れ字に対応する言語形式が存在しないが、詠嘆を表す切れ字は「古池や」のイメージを立ち上げると同時に、主題構造の主題や認知言語学でのドメインを表し、わずか 17 音節の句において少なくとも 2 つの状況、つまり切れ字の前の部分が表す状況とその後続く状況を結びつけている(詳しくは石丸雄介「古池や蛙飛び込む水の音」の英訳における解釈のプロセス)(第 14 回(2011 年)日本語用論学会大会での研究発表レジ

メ参照)。複数の状況を結びつける際、俳句はあいまいで Hiroki Sato (*One Hundred Frogs*, 1995, Whetherhill) が (14) に対して 135 の英語訳を紹介しているように、多くの解釈が生まれる。しかし (14) でも指摘したように、何でも自由な解釈が許されるわけではない。俳句の世界を可能にしているものは、言語表現としての約束事に加えて、その背後には (17a) の「察しの文化」や「くたくたくと語ることの野暮を嫌ういきの文化」が (17b) の「表現のあいまいさ」を支えている。このように文化の特徴が言語表現に「侵入」した場合、特定語句の省略や代入によって解決されるものではなく、しばしば他言語への翻訳が困難になる。

(19d) の主題構造は全体と部分の関係を示し、複数の状況を結びつけることにより、(19a-c) から生じるあいまいさを部分的に補正する役割を果たしている。「ボクはウナギだ」のような主題構造も「レストランに入って食べたい料理は何か」の文脈情報 (19a) があってはじめて成立する。その点、(19d) の主題構造は一方で文脈情報を利用して (14) の句や「ウナギ文」を可能にし、他方で (17c) の全体性を志向している。

(19e) は (19d) と同様に全体性を志向するが、言語構造上どのように全体性に関与するのであろうか。あいまいさを生む主要な原因である省略との関係でみてみよう。(16b) の碑文でみたように、「眠る」主語や「繰返さない」と誓う主語が欠け、日本語はあいまいであるとしばしばいわれる。しかし碑文の2つの主語の欠落は質が異なり区別する必要がある。最初の「眠る」主語が原爆死没者であることは碑文の性格から文脈上明らかである。過ちを犯し、「繰返さない」と誓う第2の主語は確かにあいまいであるが、ここではその責任者を問うより、原爆からもたらされた状況全体 (17c) に焦点を当て、そのような状況を繰返さないことに重点が置かれている。状況を引き起こした責任者や行為者をあまり問題にしないで (17c) の状況全体に焦点を当てる手法は、能格言語の特徴と似ている。エスキモー語・バスク語・オーストラリア土着語などの能格言語は他動詞文の目的語と自動詞文の主語が無標の格形態である絶対格をもち、他動詞文の主語が有標の格形態である能格もっている。日本語は多くの場合、英語と同じように、他動詞文であれ自動詞文であれ、主語が主格をとり、他動詞文の目的語が有標の対格をとる対格言語に属するが、時に能格言語と同じふるまいをする。例えば「(私には) 2人の兄がいる / 英語がわかる / 音楽が聞こえる / お金が必要だ。」では英語の目的語に相当する下線部が自動詞文の主語と同じ「ガ」格をとっている。(16b) の主語を欠落させたまま、目的語を含む動詞句で表される状況のみを明示しているが、この手法は出来事を引き起こす行為者よりも動詞句で引き起こされる状況の全体性 (17) こそ重要であるとみなしており、意味役割として<行為者>より<対象>を重視する能格言語と共通している。

(19e) は (19d) の全体状況との関連で (19a) とも結合して自己の主張よりも (17d) の対象依存性に敏感に反応する言語表現を生む。例えば豊富な自称詞・対称詞や敬語などは話し相手の身分や年齢によって変わる。また聞き手への配慮から聞き手に言語表現を理解する労をできるだけ少なくするために、1語の有する意味を少なくしたり、文と文のつながりを明示する。こうした聞き手志向の言語は、統語型言語に属する、話し手志向の英語などと対照的である。(19e) の対象への配慮から「殴る、近づく、結婚する」などの行為の対象は英語なら同じ名詞の目的語で表されるが、日本語では対象に後置する格助詞が「を・に・と」で区別される。また英語なら *this — that, here — there* の二分法が日本語では対象との距離に応じて「こ・そ・あ」の三分法がとられ、英語の *give* に対応する語が日本語では事物の移動のほかに「ウチとソト」の関係が加味されて「やる—くれる」と区別される。用例 (12) (13) でみた「(ら)れる」の不可抗的事態の容認も他言語なら多様な言語形式

で分担されるのに日本語では1つの言語形式で表現され、言語構造上(19e)と(19a)が結合したものである。「(ら)れる」は受身・自発・可能・尊敬という異質なものを合体してまで、文脈や自分を取り巻く周囲の状況をやむをえないものとして受容しており、あいまいな日本文化をもっとも象徴する表現といえる。

言語表現に限らず行動を含めて、日本文化はコンテキスト依存度が高いといわれる。個人的なつながりや集団のあり方を重視し、社会への信頼度が比較的に高く、暗黙のうちに慣行や周辺に順応したふるまいが多いためである(具体例については兎玉1998:183参照)。日本文化の特徴は(17a)の察しの文化や(17c)の全体性・コンテキストへの配慮を基本としながら、一方で(17b)の主体性や責任感の欠如を生み、他方では(17d)の「甘えの構造」として現れる。

#### 4. おわりに

言語を駆使する能力は人間に生得的に付与されたものであり、人間は生後の経験を通して生まれ育った社会に応じて多様な言語を獲得してきた。言語は主要にその意味を介して人間の歴史をつくり、人間の日常的活動を支えている。1節はいろんな意味に用いられることば(言語)の捉え方を通して人間の活動や社会における言語の役割を概観し、2節は言語表現における意味獲得と意味解釈を通して人間の多様性と普遍性を考察し、3節は諸言語の意味が現実世界の事態を必ずしも同じように映すものではなく、諸言語と事態の関係が社会において異なることを通じて言語と思考・文化との関連を考察した。

言語と思考・文化はそれぞれ固有の領域を有し、直接因果関係で結ばれるものではないが、時代や社会の変化に応じて変化していく。変化の発端が、性差別用語の撤廃運動・経済至上主義・サブカルチャーの出現のように、言語・思考・文化の異なる領域にあっても、あるいは変化の速度が領域によって異なるにしても、いずれもほぼ同じ方向に流れていく。同じ方向に流れるとはいえ、変化の過程ですべてが均一化されるわけではない。個別言語の言語構造と既存の思考や文化と競い結合しながら固有の変化を遂げていく。ここに言語と思考・文化のつながりが生まれてくる。しかしこれは1つの一般論にすぎない。変化は社会の地理・政治・経済・宗教・知識などの状況によって相反する現象を生むことさえある。例えば現代の情報化社会は、権力によって情報を操作したり、情報を交換して人々の意志を結集し実現したり、好き勝手に情報を取捨選択して共有する情報が乏しいなかで人々の意志結集や交流を分散させたりする。情報に罪はない。情報を何のために用いるかは人間の問題である。言語と思考・文化のつながりが個別の社会状況や社会条件によってどのような影響を受け、どのような違いを見せるかについても今後検討する必要がある。

人間は知っていることより知らないことのほうがはるかに多い。情報化社会の中であって多様な情報が氾濫しているが、その情報は人間社会に存在するであろう知識の一部にすぎない。知識の中には人間が生きていくうえで不可欠なものもある。言語知識や危険を察知する知識などである。同時に知識がなくても何の不自由もなく生きていける場合もある。例えば刑法の条文を何も知らないからといって犯罪を犯すわけでもない。知識の有無に関係なく、あるいは言語で明示されるか否かに関係なく、人間は生きていく。ここには人間の生得的な理性や感性、あるいは生後身につけた知恵が働いている。生得的に付与される能力は種によって異なり、生後の経験により獲得される知恵

は用例の (12) - (16) にみられるように言語によって異なる。いずれも限られた能力の範囲内でのふるまいであり、語られるものが種や言語によって違ってくる。人間や社会の真の姿に接近するには、言語で語られるものに応えるだけでなく、言語によっては語り得ないもの、あるいは言語を超えて感性に訴えるものにも問いかけ応えていく必要がある。そこでは意味や感情を介して人間のふるまいを支える諸原理や諸要素がどのような階層や優先順位をもって交錯しているかを明らかにすることになる。そうすることで言語・思考・文化の相互関連も今より精確になり、その普遍性や多様性も今より具体化されるであろう。

20 世紀の言語学は Saussure と Chomsky の 2 度の「革命」を経て分析がますます抽象化し、ラングや言語能力として文を形成する規則の体系を究明してきた。本稿の冒頭で述べた「言語とは何か」という第 1 の疑問に答えようとしたといえる。21 世紀はこれまでの言語学が蓄積してきた言語構造についての知見を前提に、パロールや言語運用としての言語活動のしくみを明らかにする必要がある。ここでの言語分析は言外の文脈情報を拡大して文化情報をもとり入れることになる。広範な文脈情報を含む言語活動は、意味を介して人間社会の諸活動ともつながり、「言語は何のためにあるのか」の第 2 の疑問に答えるものでもある。第 1・第 2 の疑問に絶えず立ち戻り、その疑問への応答を繰り返すことで一歩ずつ言語の全体像に接近することになろう。

(本学名誉教授)